川内山塊　今早出沢遡行～曲り沢･割岩沢下降

遡行日:09年9月19日～22日
メンバー:奥平学(L)、釣秀平、白土悟、神戸つむぎ、三井貞彦（以上、さがみ山友会）　中島節子(わらじの仲間)

越後･川内山塊の主流たる「早出川」はゴルジュが連なる悪渓で、矢筈岳に源を発し多くの支流を分けながら流下する。
上流部で「今早出沢」と「割岩沢」に二分するが、今早出沢にはガンガラシバナの大岩壁があり、割岩沢にもジッピと呼ばれる逆V字状のゴルジュを擁していて、共に経験を積んだ沢屋にしかお目にかかれない秘境だ。一度は我が目で見て触れてみたいと思うのも沢屋のさがというものか。

****

[第一日目]　8月19日
一の俣沢橋の先の小広い路肩に車を止め、入渓の支度を済ます。
橋の袂から沢沿いの踏み跡に踏み込むが途切れ途切れで、さっさと沢に入って遡行していくほうが世話はない。
枝尾根のコルを越え、反対側のアカバ沢を下っていけば一下りで「今早出沢」の河原に降り立つ。
本流の早出川はゴルジュの連続する悪沢だが、今早出沢は一転して何もない河原状が続く。
唯一の滝らしい「横滝」を左岸側から取り付いて、右岸のリッジを登って越えると広々とした河原になっていて本日の宿泊地とする。
ツエルトを張り、焚き火を囲めばいう事のない安堵感に包まれる。
一の俣橋8:00→アカバ沢出合10:45→横滝14:00→テン場14:15

[第二日目]　8月20日
暫く前日と同じような河原状の沢を遡行していくが、両岸が立ってスラブ壁が目立つようになるといよいよガンガラシバナの大岩壁帯に入っていく。
正面は200mにも達する大スラブ壁が立ち上がり、左岸右岸もスラブ壁に取り囲まれたまさに圧倒的という他はない景観が出現する。
沢はその基部で二俣に分かれ、左俣は「魚返りの大滝」となって瀑水を落としている。右俣は「右方ルンゼ」と呼ばれているが、スラブ壁の上を細い水流を落して大滝となっている。
その右方ルンゼには先に到着したぶなの会の6人パーティーが取りつき、登り始めている。その後を追うように我々も取り付くが、間もなく別な3人パーティーも到着して登り始めた。
何と15人ものクライマーが水流の左右に別れ取り付いて登っているのだ。広大な壁ゆえ問題はないにしても、壮観というか、呆れるというか…（ぶなの会のメンバーも、後続の3人パーティーも最近他の沢でも逢っていて、何と沢屋の世界の狭い事か。）
スラブ壁の登攀そのものは3級程度の容易なもので、6ピッチで登り終えて再び沢に戻る。
細いゴルジュとなった沢は、多少てこ摺る小滝を落としながらやがて藪の中に消え、間もなく稜線に上がる。
潅木の密生した稜線を藪を掻き分けながら進み、「曲り沢」の源頭に近づいたところで下降を始める。
直に窪状になり、水も流れて沢の形状となる。
数本の小滝をクライムダウンすると突然視界から沢が消え、滝となっている。
覗き込むと上段は10m位の滝で、その下段はどうなっているか不明だ。
懸垂して上段部分を降りるとそのまま下段を

覗き込むも状態はよくわからず、このままロープを投げ下ろす気にはなれない。
右(右岸)がテラスになっているのでそのテラスに移ってロープをセットし直す。やはり着地する沢床は見えないがその先にまた滝がある事はわかる。ここを降りてもその先の滝は下降できるものなのか。
とに角ここを降りてみなければ話しははじまらない。不安を押し殺し、登り返しも覚悟してロープを投げ降ろす。
壁がコの字状になっていて、まるで井戸の底に下りていくようで頭上からは瀑水が容赦なく落ちてきてずぶ濡れとなる。
途中にチョックストーンが挟まっているが、その間を抜けて何とか沢床に降りる。40m弱くらいだったろうか。
ロープを外すと次の滝の様子を偵察するが、連瀑となっていて下が良くわからないがまー、何とかしていくしかなかろう。
全員が降りるともういい時間だ。ゴルジュの中だがもう動く訳にはいかない。幸い天気はよさそうだし、どうやら6人が横になれるスペースもとれる。流木をかき集めて焚き火もできて、この状況下ではまずまずの一夜を過ごす事ができた。

テン場 6:00→右方ルンゼ 6:40→登攀終了点 11:00→稜線 13:40→曲り沢下降点 14:30→テン場17:10

[第三日目]　8月21日
一夜が明け、支度を済ますと早速滝の前まで進む。落ち口は人一人が漸く降りられるほどの狭さで、すっぽりとチョックストーンが挟まっている。見下ろすと何段かになって落ちているようで、降りられそうな気もするが確信は持てない。
先の様子が分からないでは下降に踏ん切れない。左岸の草付きをロープを曳いて登り、潅木帯をトラバースすると漸く先の様子がわかる。
このまま潅木帯を斜下降していけば何とかなりそうだ。ロープをつけてトラバース気味に下降していく。顕著なルンゼにでたところでそのルンゼを下降して漸く沢に降り立つ事ができた。
メンバーの顔に安堵の表情が浮かぶ。
沢は狭いゴルジュ帯となって、そこをブリッジやら、へつりやら、泳ぎやらを交えて下降していく。当然その間に滝が落ちていて懸垂となるが、しかし、先のわからない滝はもうなく気分的には楽なものだ。何度懸垂をしただろうか、小広い河原となるとついに「割岩沢」に出合う。
「いやー、大変だったネ。」ついこんな言葉がお互いの口から洩れる。
「さて、どうしよう。」というハラハラ、ドキドキがないと沢は面白くない、ってのも確か。
この曲り沢はWeb検索すると1件、某会が遡行した記録は見られるが、それは7月に遡行したもので、記録も簡単な記述で、上流部は雪渓に埋まっていて殆ど参考にならないものだった。
下降して思ったのだが、懸垂支点の残置ピンや残置スリング等は全く見当たらず、断定はしないがこの沢は過去、下降はされていないのではないか。
後はのんびりした気持ちで割岩沢を下る。随所にゴルジュ帯があり、それらをヘツリ、泳ぎなどで下って行くがそれ程厄介なケ所はない。
ゴルジュが更に狭まり、両岸が立ってくるとそろそろジッピか、と気持ちが逸る。間もなく逆V字状になった暗く狭隘なゴルジュが現れ深いトロになっている。「ジッピだ。」
ここはこのジッピの通過に強い思い入れのあるリーダー氏にトップはお任せ。ロープを曳いてリーダー氏はジッピの奥に吸い込まれて行くが、間もなくOKのコール。メンバーも次々とジッピに入り泳ぎ下っていく。

滝の後退現象という事だが、全く不思議な空間だと思う。皆、ニコニコ顔でジッピを抜け出てくる。そしてここに達したパーティーがするであろう記念写真を取り合ってから先に進む。
直に沢は小広い河原になっており、流木も得られる。本日はこれまで。
焚き火を囲みながら本日のあれこれを語り合う。こんな時間が何物にも替え難い至福の一時だ。

テン場 6:40→二俣 9:50→割岩沢出合 12:50→ジッピ 15:00→テン場 15:45

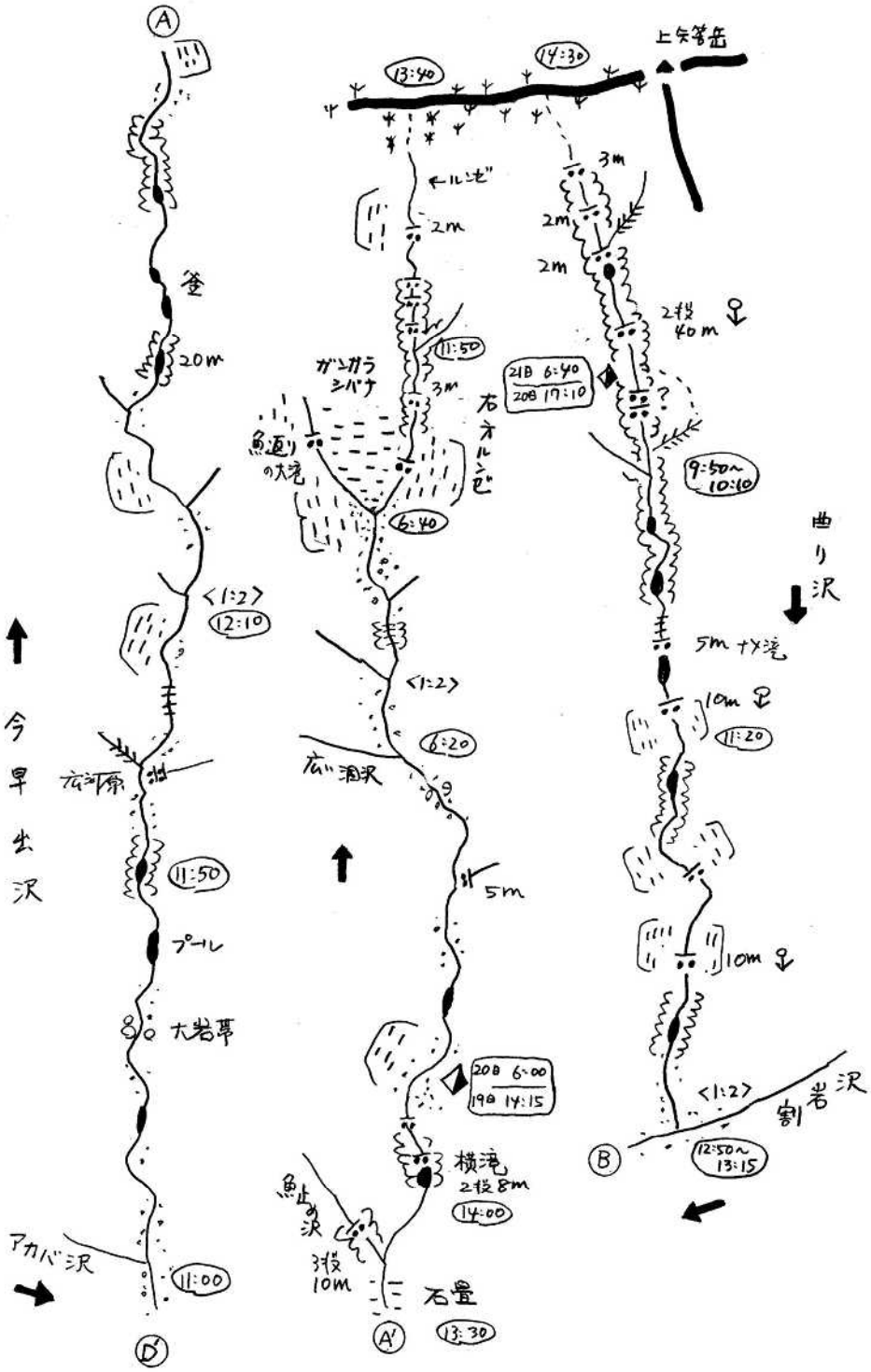
[第四日目]　8 月 22 日
朝の間少し雨がパラついたが直に晴れ間を見せる。今回は天気に恵まれ、山の神に感謝せねばならないだろう。
沢はいたって大人しい表情をみせていて、てこ摺る事はなにもない。時折ゴルジュや大渕を出現させるが、飛び込みやら泳ぎやらで難なく通過していく。濡れる事を嫌う者は、己の最高のパフォーマンスを見せてへつって行く。
「今出」の二俣に着きここから左俣の今早出沢に入り、入渓点のアカバ沢まで遡行する。この間は容易な渓相で、特記すべき箇所はない。
アカバ沢から一の俣越えのルートを辿って車に戻って山行を終える。

テン場 7:00→今出 9:50→アカバ沢出合 11:20→一の俣橋 15:25

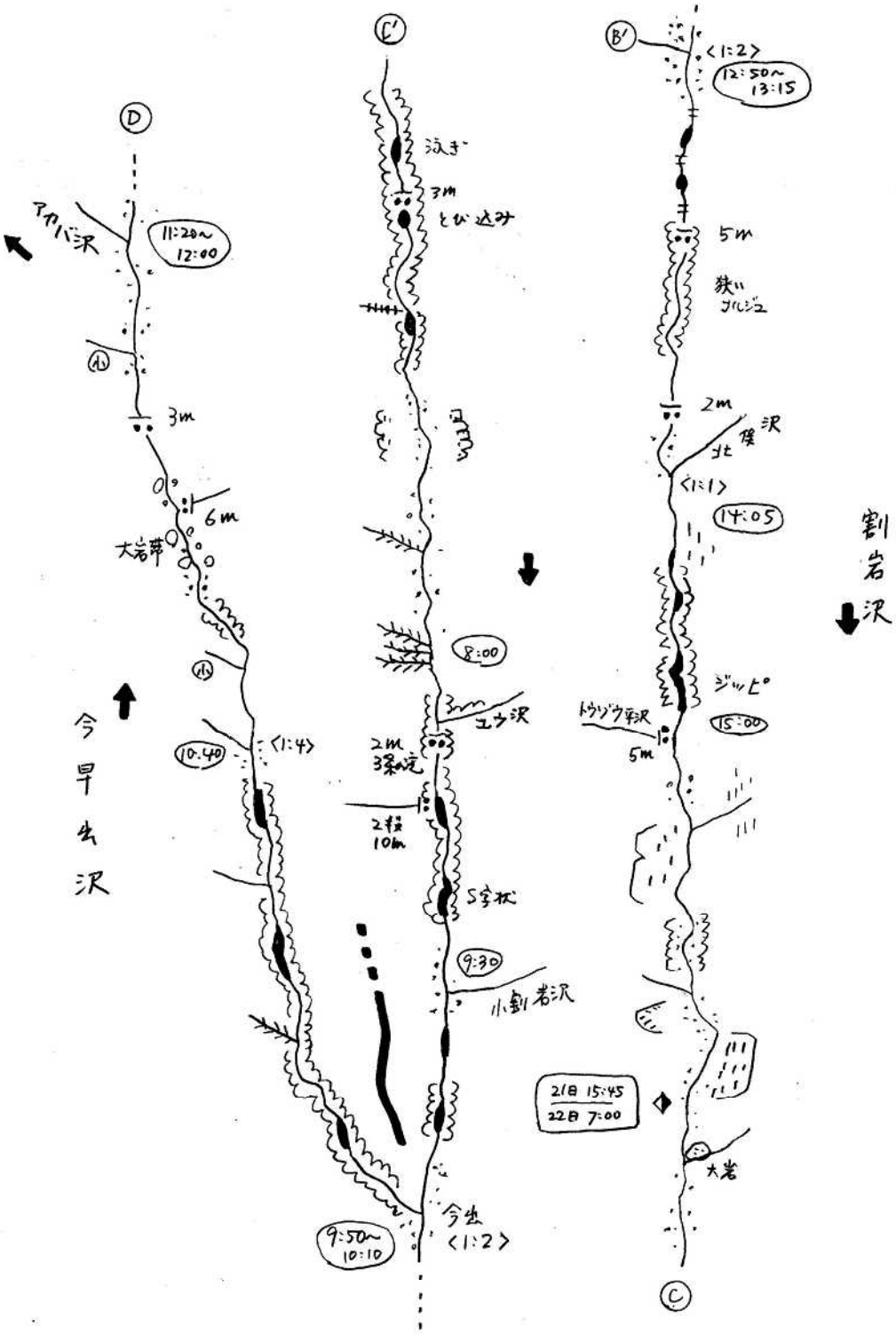
****

ガンガラシバナを登ってジッピを下る、という“いいとこ取り”の周回コースだったが、充実した文句なしのコースだった。
「曲り沢」は本文の中でも記したが過去、下降された形跡がなかった。
今回巻いて下降した部分がどうなっているのか気にはなるが、再度訪れる機会はあるだろうか。

[記:三 井 貞 彦]



09年 9月19日〜22日
川内山塊・今早生沢〜割岩沢下降　No. 1



09年 9月19日〜22日
川内山塊・今早出沢〜割岩沢下降

No 2